

かつて日本の村々で広くみられた「共有膳枕」の習俗。どのように生まれ、また立川の地域ではどのように営まれていたのでしょうか。

「共有膳枕」とは？

冠婚葬祭や講などの行事には「人寄せ」、つまり宴会がつきものです。かつての農村社会では、宴会は自宅で行われました。村の人たちが集まって、酒を酌み交わし、ごちそうを共に食しました。農事の合間の楽しみであり、仲間とのつながり確かめる大切な場でもあったのです。

こうした宴会の料理は、一人前ずつ膳に飯、汁、菜、香の物をのせて出す本膳料理(日本料理の正式な形)で供されるため、主に漆塗りの膳枕が使われます。しかし漆器は高価で、個人で揃えるのはとても大変なことでした。そこで、組や講、親族、親しい者同士などが仲間となり、数十人分の膳や枕を共有する習俗が生まれました。民俗学ではこれを「共有膳枕」と呼んでいます。

昭和30年代以降、各地に式場や飲食店ができてくると、人寄せの場は外部の施設へと移り、共有膳枕やその収納倉庫である膳枕倉もほとんど見られなくなりました。

【羽村市での民俗調査による膳枕類の名称と使い方】

図1
うどんの場合(婚礼)

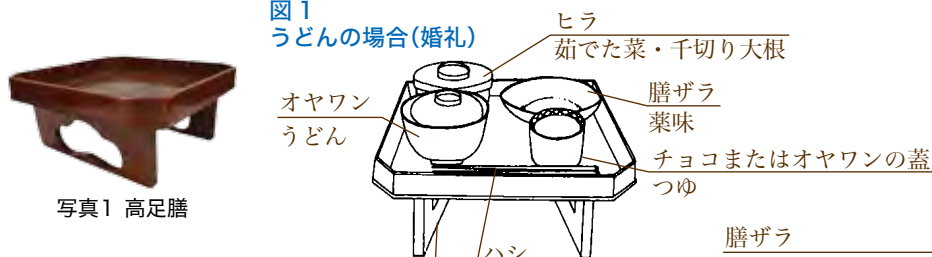


写真1 高足膳

写真11 湯桶

図2
飯の場合(主に仏事)

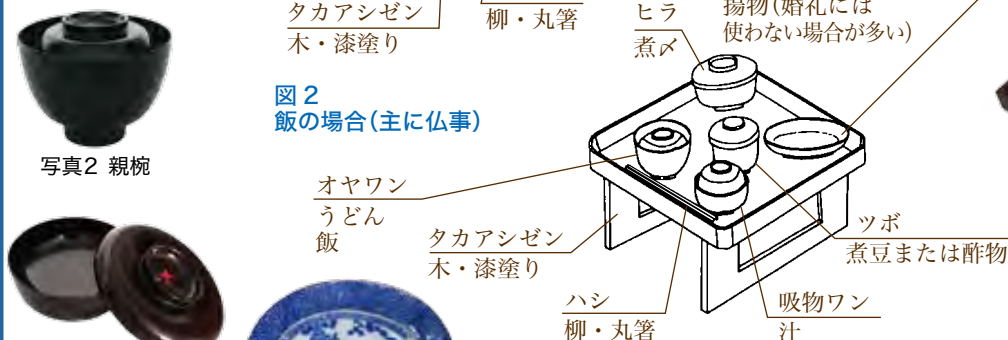


写真2 親枕

写真10 切溜

写真3 平枕

写真6 陶磁器皿

写真4 壺枕

写真5 吸物枕

写真7 角樽

写真8 銚子(上)、三蓋盃(下)

写真9 布袋(上)、木箱(下)

「共有膳枕」の主な種類

膳

一人用の食事をのせる台。日常には食器を収納できる箱膳、ハレの日には漆塗りの会席膳や高足膳(写真1)が使われることが多かったようです。

枕

食物を盛る漆塗りの木枕。多摩地域では、一つの膳に親枕(飯枕)(写真2)、汁枕、平枕(写真3)、壺枕(写真4)を並べるのが基本でした。料理や宴の内容に応じて、吸物枕(写真5)、陶磁器皿(写真6)なども使われます。

酒器

宴会には酒がつきものです。角樽(写真7)は、結納や婚礼の際に、酒の贈答や宴席の飾りとして使われます。三々九度には銚子と三蓋盃(写真8)が使われました。

収納具

膳枕を収納していた布袋や木箱(写真9)には、所有者名や品名、購入年などが書かれていることがあり、研究の重要な手がかりになります。

その他

立川では、ハレの日によくうどんを食べました。共有膳枕の中にうどんなどを入れる切溜(写真10)や汁を注ぐ湯桶(写真11)がみられることも、この地域の特徴といえます。

南関東の共有膳碗

共有膳碗は近世後期頃から各地で確認され、明治期には広がりを見せていました。その成り立ちには、江戸や京阪の料理文化の地方への伝播、漆器の生産量・流通量の増加、農村社会の生活の安定や経済力向上など、さまざまな背景が絡み合っていたと考えられます。

都市の華やかな料理文化が流入し、有力者から膳碗を借りたり共有の膳碗を持ったりすることで、地方の農民たちも格式ばった儀礼や食膳を自分のものとするできるようになったのです。その過程には、農民たちの自治意識や平等意識の醸成もうかがえます。また、近世から明治時代にかけての共有膳碗の所在分布が、台地や丘陵地、山地などの畑作村に顕著であり、沖積平野の水田地帯にはほとんどみられないことから、前者に早くから膳碗の共有を成立させる社会的な基盤があったとする指摘もあります。

畑作村の場合、近世中期からの商品作物の普及によって経済力が向上し、各家の経済力の平準化がおきやすく、膳碗類の購入が行いやすかったのではないかとされています。

共有膳碗は全国にみられますが、共有する主体には以下のように地域性がうかがえます。

- 東京都多摩地域から神奈川県相模川東岸
→地縁的な相互扶助組織である「講中」が主体となっているのが一般的。
- 福島県・栃木県・山梨県など
→村や組などの地縁集団が主体。
- 広島県→浄土真宗の講が主体。
- 静岡県→^{こうしんこう}庚申講で共有する例が多い。これに対して、膳碗は共有せず個人で揃える例も全国的にあった。
- 富山県→^{たのもしこう}輪島塗の商人などからののはたらきかけで碗頼母子講(9ページに注釈あり)がつけられ、お金を融通し合うことによって家ごとに膳碗を揃えた例が多く報告されている。

成立年代や運営方法

東京・神奈川・埼玉を中心に行われた調査によると、寛政5年(1793)の埼玉県入間市坊の例がもっとも古く、次に文化2年(1805)の神奈川県相模原市(旧津久井町)鳥屋・^{とや おおがみこうじゅう}大上講中が古いようです。大上講中の場合、文化2年銘を持つ飯櫃が神奈川県立歴史博物館に所蔵されています。文政期(1818～1830年)以降は次第に事例が増えていきます。

運営の方法も多様です。東京都福生市・^{うちで}内出稲荷講の共有膳碗の場合、成立は江戸時代にさかのぼると考えられています。ここでは講員への金銭の貸付も行われていました。

米が収穫できてもお金に困る家が多く、豊かな家と貧しい家の差が出ないようにお金を融通し合う、互助の精神から貸付制度が始まったとされています。

神奈川県相模原市・^{たいまいちば}当麻市場講中では、「^{わりほう}割法」といって各家が経済状況に応じて4段階に分けられ、膳碗購入のための拠出金額を割り当てられていました。これと似た「応分負担」の例は東京都八王子市でも報告されています。

どの地域でも膳碗は共有財産として、お金と同様に大切にされていたことがわかります。相模原市などの拠出金応分負担の例からは、内出稲荷講で語られた「豊かな家も貧しい家も差が出ないように」「互助の精神」が、よりはっきりとうかがえます。

成員個々のさまざまな差異を内包しつつ助け合う精神が、このような民俗の生まれる背景にあったのではないかと考えられます。

(民俗・地誌部会編集委員 神 かほり)

立川市内の共有膳碗

立川市には、「組」と称する集落や講中、集落内の家々が協力し合う膳碗の組合がありました。民俗・地誌部会の調査では、柴崎地区と砂川地区のあわせて13カ所で膳碗の所在を確認できました。

膳碗の利用年代を近隣の例と比べてみましょう(6ページのグラフ1参照)。南関東では、文化14年(1817)以降、毎年のように各地で共有膳碗を設ける例があり、その傾向は明治10年(1877)と昭和5年(1930)の2つの時期に画期を迎えます。

市内でも同様の時期に2つの画期があり、傾向は似ています。共有膳碗が認められるのは柴崎地区で早く(写真12：弘化2年[1845])、砂川地区は明治時代に入ってからです(明治7年[1874])。以後、砂川地区の例が続ぎ、明治末から昭和のはじめにかけて柴崎地区の例が登場します。この背景には、養蚕業の隆盛、甲武鉄道や立川飛行場の開設等がかかわっていると思われます。

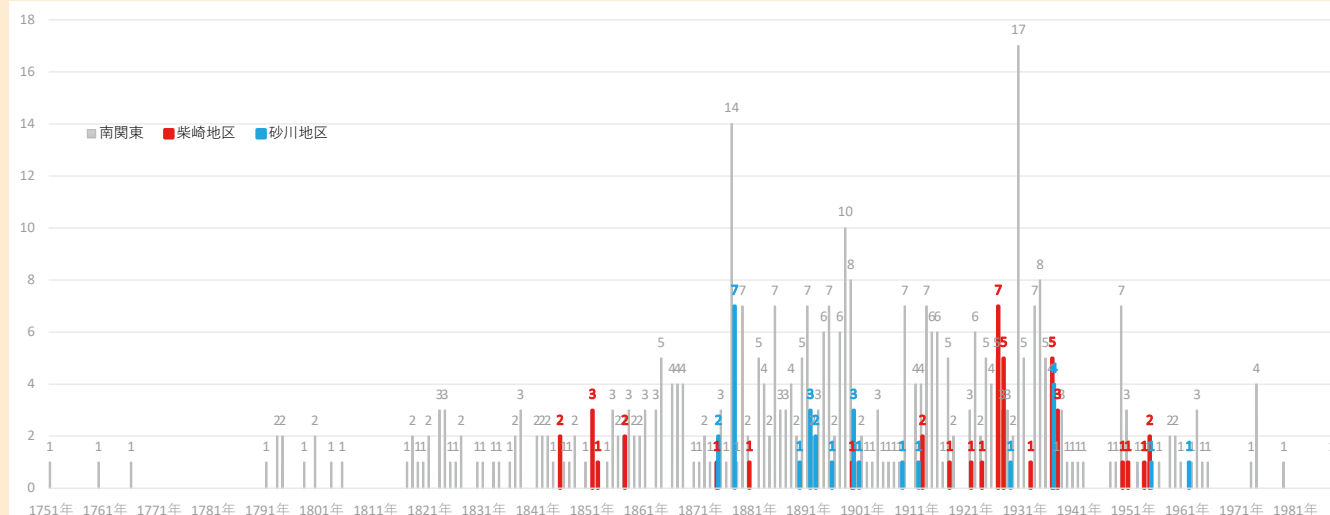
共有膳碗を設ける例は以後減っていきます。6ページの表1には、膳碗の共有主体を一覧にし、最も古い記録(紀年銘)と、最も新しい記録(膳碗組合が解散した年、もしくは、所有していた膳碗を寄贈した年)を示しました。100年を超えて存続してきた共有膳碗の習俗は、高度経済成長期を挟んで消滅段階にあるといえます。

所有形態をみると、柴崎村^{なめし}名主が著した「公私

共有膳碗 いまむかし

本特集では、市民の方々の協力やこれまでの調査・研究から得られた立川市域の「共有膳碗」について解説します。

グラフ1【立川市内の共有膳椀紀年銘の年次分布】



- (1) 紀年銘は、膳椀購入(寄贈)時に収納具へ記された墨書等をさす。
- (2) 南関東の事例は、『南関東の共有膳椀』所載データベース「紀年銘のある膳椀類」(397件)をもとに、立川市内の山中講中(12件)のデータを除いて作成。
- (3) 立川市の事例数：柴崎地区42件、砂川地区29件、総数71件。

表1【立川市内の共有膳椀所有主体・紀年銘・寄贈年・解散年】

町名	所有の主体	紀年銘	寄贈年・解散年*	所蔵
富士見町	山中講中	弘化2年(1845)	平成14年(2002)	立川市歴史民俗資料館
柴崎町	番場組	—	—	立川市歴史民俗資料館
	出口組	安政4年(1857)	平成16年(2004)	立川市歴史民俗資料館
錦町	下和田組	嘉永5年(1852)	平成11年(1999)	立川市歴史民俗資料館
幸町	八番組／東組	明治28年(1895)	昭和56年(1981) 平成5年(1993)**	立川市歴史民俗資料館
柏町	六番組／東地区	明治24年(1891)	平成14年(2002)	立川市歴史民俗資料館
	七番組	—	平成28年(2016)	立川市歴史民俗資料館
砂川町	三番組／上組	明治7年(1874)	令和2年(2020)頃	個人
	五番組／中講中	明治10年(1877)	平成7年(1995)	立川市歴史民俗資料館
上砂町	二番組／上組	明治22年(1889)	平成18年(2006)	立川市歴史民俗資料館
	二番組／中組	—	昭和60年(1985)	立川市歴史民俗資料館
	二番組／下組	明治41年(1908)	平成19年(2007)	個人
西砂町	殿ヶ谷組	明治44年(1911)	平成12年(2000)	殿ヶ谷公会堂(一部)

*立川市歴史民俗資料館所蔵例は寄贈年、左記以外の所蔵例は解散年。

**八番組の上段は解散年、下段は寄贈年。

日記」からは、名主家が自家用に購入した膳椀の一部を組へ寄贈し共用されていたことがわかります。有力者のみならず個々の家々がさまざまに支え合うことで成り立ってきた様子がうかがえます。

ハレの風景にみる共有膳椀

表紙をご覧ください。中央の大きな写真は八番組(幸町)の東の膳椀組合が解散する際、「結婚式」を模した会食の様子です(表紙写真①、昭和56年[1981])。矢印の順に準備をし、上座には水引をかけた盃、銚子、角樽が飾られ、まず、脚付き膳に配膳された酒肴(陶磁器に盛り付けられた煮物、きんぴらゴボウ、酢の物、刺身)を、次いで親椀にご飯・うどんを盛って食したようです。

この会食からは、二つの点を指摘できます。一つ目は、

共有膳椀が社会的な承認を支え、格式をもってハレの場を彩るものであったことです。普段の一汁一菜ではなく、膳の形式でご馳走(うどん)をいただく点に特色があります。婚礼では酒器を用いてお酒を飲み、新たな夫婦が認められるわけですが、この儀式は組合員みんなの眼差しを集めた、格式あるものでもあったのです。それは、共有膳椀の目録に「家内喜多留」※と称した角樽が筆頭に挙げられていたことにもうかがうことができます(表紙写真⑤)。二つ目は、この会食自体が趣き深い、膳椀組合の解散方法であったことです。たとえば、西砂町の殿ヶ谷組は、平成12年(2000)に解散し、膳椀を組合員へ分配しました。しかし、「婚礼用の銚子」「家内喜多留(角樽)」、湯桶などは分けずに殿ヶ谷公会堂内の飾り棚に解説を付して展示しています(写真14)。

膳碗は「高価な食器」という意味だけにとどまらず、組合員が共に過ごしてきた記憶や気持ちを象徴するものでもありました。というのも、組合員間の交流は、結婚式、葬式のみならず、出産、宮詣りなどにも及んでいたからです。市内では、地親類^{じしんるい}という言葉が聞きました。親族にもひけを取らない社会的な意義があったのでしょう。

八番組の例では、昭和26年(1951)当時、膳碗を使用していた組合員20名に正副の違いに応じた使用料の差が設けられていました。そして、その徴収は当家の両隣家が担うものでした。使用料等に差がある例は、移住者等を段階的に受け入れる仕組みとして、各地に類例があります。両隣家が重要な役割を負っている点は、隣接する武蔵村山市においてもみられず、共有膳碗の地域の特徴として注目されます。行事を当家まかせとせず、組合がこまやかな配慮をしながら支えていたのでしょう。使用料の差はその後解消され、同額になりました。

共有膳碗の習俗からは、近隣の家々が助け合いながら地域社会をつくりあげてきたことがわかります。

※家内喜多留：柳を素材としたことにちなむ酒樽の別名。角樽ともいう。4ページの「酒器」も参照。

未来のハレの風景に向けて

以上のとおり、市内における共有膳碗の習俗の成り立ちと特徴の一端をご紹介しました。

立川市内の共有膳碗については、不明点(入手先、膳碗倉、帳簿等)も少なくありません。民俗・地誌部会では、引き続き、その成り立ちや特徴の解明に寄与してまいります。

民俗や文化史の解明を通じて、市民の方々にとってのハレの場がより良い風景になることに寄与したいと思っております。

(民俗・地誌部会 部会長 中野 泰)

写真・図の説明と出典

【表紙】

写真①：「祝言(結婚式)」を模した会食

写真②：うどんを切る組合の男性たち

写真③：膳碗の準備をする組合の女性たち

写真④：盛り付け・配膳の様子

※写真①～④は、立川市歴史民俗資料館蔵のモノクロネガフィルムをもとにカラー加工を施したため、実際の色調と異なる箇所があります。カラー化には、AI機能を搭載したAdobe Photoshopニューラルフィルターを用いました。

写真⑤：昭和36年(1961)の共有膳碗目録。二番組の下組(上砂町)

【4～7ページ】

※図1、2：米川幸子 1987「幕末・明治期の食器―農村を中心に―」『多摩のあゆみ』49号の図2、3をもとに一部改変。

写真1～12：立川市歴史民俗資料館蔵

写真13：石塚和生氏による提供

その他の写真：民俗・地誌部会の撮影による。



◀ 写真13 殿ヶ谷組膳碗倉収蔵物仕分分配の際の記念写真。



◀ 写真14 殿ヶ谷公会堂で展示されている共有膳碗(一部加工)。

参考文献

石川悦子 2012「村のくらし―膳碗組合をとおして―」『資料館だより』54 武蔵村山市立歴史民俗資料館

小川直之 2002「ハレの食器と共有膳碗」 印南敏秀ほか編『もの・モノ・物の世界―新たな日本文化論』 雄山閣

関東民具研究会編 1999『南関東の共有膳碗―ハレの食器をどうしていたか―』

相模原市教育委員会 1988『当麻：相模原市村落景観調査報告』

相模原市教育委員会 1994『古山の組織と運営(相模原市民俗調査報告書)』

神かほり 2001「共有膳碗の成立をめぐる」『民具研究』123号

竹内由紀子 2010「共有膳碗の全国的拡がり」 田中宣一先生古稀記念論集編集委員会編『神・人・自然―民俗的世界の相貌―』 慶友社

田中宣一 1989「多摩市内の『講中物』」『ふるさと多摩：多摩市史年報』2号

増田昭子 1989「多摩市内の『講中物』について」『多摩市の民俗社会生活(多摩市史叢書：1)』

増田昭子 1993「内出の膳碗倉」『福生の民俗 民具Ⅱ 膳碗倉の用具(福生市文化財総合調査報告書：26)』